

## 2025 年度第 3 回生物多様性の保全に向けたネットワーク会議 議事要旨

日時：2026 年 2 月 21 日（土）13:30～16:00

会場：I-site なんば 2 階 C-1

オンライン（Teams ウェビナー）・現地との ハイブリッド開催

参加者： 41 名（内オンライン 15 名）

### 内容

#### 1 はじめに

都市の緑は多様な形で存在し、人間に生態系サービスとして多くの恩恵を与える一方、緑地の減少や外来種の侵入により都市生態系が危機にあることを共有した。特にクビアカツヤカミキリが桜等に甚大な被害を与えている現状を踏まえ、「将来どのような都市に住みたいか」を考える契機として生物多様性の重要性を確認した。

#### 2 基調講演

##### ①「都市の生態系保全と市民の関わり」

佐藤 真行氏（神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教授）

生態系サービスに加え「自然の恵み（NCP）」の考え方を紹介し、都市緑地が健康、コミュニティの質、暑熱・騒音低減等に寄与する点を整理した。

国際潮流として「Nature Positive」「30 by 30」を取り上げ、OECD の役割を説明した。都市部（人口過密による自然への負荷）と地方（人口減少による里山維持困難）の課題の違いを指摘した。

自然経験の減少により後天的に形成される「バイオフィビア」が共存を阻害し得る点を示し、自然体験が関心喚起の鍵であるとした。

緑地保全は公共財としての管理に加え、コミュニティガーデン等の「クラブ財」としての自発的取組の促進が必要と提起した。

##### ②「大阪城公園における生物多様性保全の取り組み」

菅野 浩一氏（大阪城パークマネジメント共同事業体緑地管理部門・大和リース株式会社）

大阪城公園は歴史文化と自然が混在し、渡り鳥の中継地点となる等の価値がある一方、観光客増による踏み荒らし、外来生物侵入、広大な敷地の管理コストが課題であると報告した。

市民ボランティアと協働し、外来植物除去、桜保全パトロール、生き物調査、清掃等を実施。クビアカツヤカミキリ調査ではボランティアが重要な役割を担うとした。

今後は「きれいに撤去」中心から、枯れ木・落ち葉・剪定枝などを活かす管理へ転換し、多様な生物の生息環境確保を目指す方針を示した。

### ③「大阪市生物多様性関連施設「自然体験観察園」でのボランティア活動の成果」

榊元 慶子氏（大阪公立大学客員教授・大阪エコボランティア）

大阪市生物多様性戦略に沿い、多様な主体の連携が重要であるとした。

鶴見緑地の自然体験観察園での成果として、以下を報告。

野草広場：選択的／デザインの草刈りで生息環境を確保し昆虫増加が見られる。

実生林創生：どんぐりから育てた樹木が成長し、CO2 吸収にも寄与。落ち葉を残して土壌を豊かにする管理。

田んぼ・畑：農薬・化学肥料を用いず、生き物のつながりを学ぶ場を整備。

湿地復元：多様な生物の出現と、継続モニタリングの実施。

特定外来生物（アメリカザリガニ）駆除を実施し、生物の放流・投入は生態系を乱すため避けるべきと強調した。

実態把握に基づく学習プログラムと適切な維持管理により、成果を市民へ還元する方向性を示した。

## 3 警戒情報

### 「クビアカツヤカミキリ対策」

秋田 耕佑氏（大阪市立環境科学研究センター）

クビアカツヤカミキリはバラ科樹木（桜・梅・桃等）に侵入し枯死させる特定外来生物で、大阪府内では2015年以降急速に拡大し、市内でも被害が深刻化していると説明した。

幼虫が1～3年かけて樹木内部で成長し、フラス排出が特徴である。

対策は早期発見・早期防除が要であり、見回り、薬剤注入、ネットによる飛散防止、伐採等の組合せが必要とした。

堺市の捕獲作戦事例を紹介し、認知度向上には有効だが、地域連携と複合対策の設計が重要である点を共有した。

## 4 動画制作発表

各班がコンセプト・視点・ターゲットを設定し動画を制作。

1 班：生き物視点（虫の目線）で都市の緑を表現。小学校低学年向けに身近さを重視。

2 班：石像を語り手に「命のつながり」を表現。小学校低学年向けに遊び要素を工夫。

3 班：都会の中心に緑がある理由を伝え、考えるきっかけを提供。大学生向けに平易な表現。

4 班：自然が都市景観に溶け込む工夫を地球環境の観点から提示。高校生・大学生向けに巣箱や落ち葉活用等を紹介。

## 5 ディスカッション

若い感性による表現は、生物多様性の魅力を伝える試みとして評価された。

一方で、生物多様性に関心のない層へどう届けるかが共通課題として議論された。

班別の主な論点：

- 1 班：専門用語回避と身近な題材の有効性／体験機会の拡大／情報を絞り焦点を明確にする重要性。
- 2 班：ターゲットとメッセージの明確化／情報過多の弊害／「里山」の定義・特徴を分かりやすく説明する必要／長期的な効果検証。
- 3 班：言葉の難しさ、行動の分かりにくさ、必要性理解不足、嫌悪感が障壁／幼少期からの自然体験とコミュニティ形成が解決策。
- 4 班：発信者自身の理解の深さが前提／視点転換（虫目線等）や具体情報の提示が有効／ポジティブなメッセージで入口を広げる重要性。

都会化による自然体験の減少が生物嫌悪を助長し、伝達難度を高めている点を確認。「新・里山」のように都市で里山機能を部分的に担う場が、自然とのつながりを再認識させる契機になり得るとした。

都会化が進む中で自然体験が減少し、生物嫌悪が増える傾向にあるため、生物多様性を伝える難しさが増していることが確認された。新・里山のような場所が、都会の真ん中で「里山ではないが里山の機能を持つ」工夫（落ち葉をそのままにするなど）を通じて、人々に自然とのつながりを再認識させるきっかけとなることが期待されました。動画は、ポジティブな伝え方で、人々に気づきを与えるものとして評価された。

講演者への質疑応答（要旨）

佐藤氏：都市では多様な自然に触れ、違いを理解することが重要。動画は完成品というより議論・問題提起のきっかけとして活用してほしい。

菅野氏：大阪城公園の石垣は史跡として管理の特殊性がある。外来生物は対策が必要。石（人工物）に注目した動画視点を評価。

榎元氏：生き物さがしで個性とつながりを学べる。迎合せず工夫して伝える必要。ボランティアは歓迎姿勢と現場で学べる仕組みが世代交代に寄与。普及啓発の評価は来場者数だけでなく政策効果の数値指標が必要。

秋田氏：捕獲作戦でクラウドファンディング活用、結果共有などの見返り設計が有効。キーワードの押し付けを避け解釈の幅を残す「ニュートラルさ」が入口を広げる。

## 6 まとめ

これまで「都市における緑の役割」を軸に、1 回目は公園改善、2 回目は「新・里山」フィールドワーク、3 回目は議論の方向性確認として実施した。

共通認識として「生物多様性の概念を伝える難しさ」を再確認し、今回導入した動画を含む既存 SNS 発信がどの程度効果を持つか、評価指標を含めた効果検証が今後の課題として整理された。